

シャーマン教と東北民族および文化

逢 増 玉

一、生存環境とシャーマン教の誕生

古い時代から清朝中期まで、中国東北地方の面積はかなり大きくて、広い。現在の黒龍江省、吉林省、遼寧省のほか、外モンゴルの部分地区とロシアのかなり広い地区を含め、その版図に組み込んでいる。かつて100余りの民族(部族)がこの地方に誕生し、そして生活していた。例えば東北夷、肅慎古朝鮮、東胡、扶余、高句麗、烏桓、鮮卑、邑婁、匈奴、勿吉、室韋、契丹、靺鞨、渤海、女真、モンゴル、満州族、ダフル(Daur)、オロチョン(Oroqen)、エヴェンキ(Ewenki)、シボ(Xibe)、ホジェン(Hezhen)、吉里迷、苦夷がある。これらの民族が生活していた自然の地理環境は平原、草原、河、湖、海、高山、森林から成るので、彼らの生活と生産方式を大体、遊牧、漁労、狩猟と農耕に分類することができる。その中に、大多数の民族の生産方式と生活様式は主に漁労と狩猟であるが、一部分の民族は農耕に従事することもある。しかし、昔の東北地方では、やはり遊牧、漁労、狩猟が中心である。

古代、人類の生産力、即ち自然を征服して利用する能力は比較的到低く、人々は生存のために自然から食物を獲るので、自然に依存するところは大きかった。従って、自然に対する敬畏と崇拜の情緒、心理が生じてくる。このような心理は一定の程度に溜まると、原始宗教へ変化していくのである。東北のシャーマン教もこのような状況下で生まれたのである。先学者の長い間研究によると、一神教が現れるまでのほとんどの巫術と原始宗教はシャーマン教の性質を持っているという。シャーマン教の分布は非常に広い。中国の東北、ロシアのシベリア、アメリカ州のインディアン文化に、シャーマン教が存在している。但し、中国の東北とロシアのシベリア地方にはシャーマン教の主要な発祥地であるだけでなく、シャーマン教の最も典型的なものを見出すことができる。

シャーマン教は一種の多神教であり、その基本観念は万物に神霊が宿ってい

るという有霊論と有神論である。即ち、1. 霊魂は不死であると信じる。2. 人間世界の外に、神霊の世界が存在すると考える。3. 広大な宇宙には、存在しているあらゆる生物と無生物、つまり万物は、神様の宿るところであり、神様はいたるところに存在し、神様は存在しないところはないと思っている。4. 人間はもし自己の願いを神様に伝えたり、神様の保護と助けを求めたり、また、神様との意志を疎通したりしようとするならば、この「シャーマン」という仲介を通して、初めて実現可能になる。「シャーマン」というのは神様に通じる能力を有し、神様の助けを得ることができ、奇妙な現象を知ることができ、また人間と神様との二つ世界を疎通する使命を担うという人のことである。「シャーマン」という言葉は北方アルタイ (Altai) 語族の満語支の女真語に起源し (エヴェンキ語から来るとする人もいる)、ロシア人によって西ヨーロッパに伝えられ、ついには国際的に通用する術語となった。中国の歴史書には、シャーマンをおかして「沙曼、薩瑪、沙瑪、撒麻、撒滿、珊瞞」などとも書き、南宋時代に著した『三朝北盟会編』の中に、このような記録は最も早く現れた。「シャーマン」の原意に関しては、以前には「興奮者、癲狂者、病狂者」と解釈するのが一般的であった。しかし、吉林省社会科学院のシャーマン教研究者である富育光氏は満州族語、ホジェン語、シボ語、オロチョン語、エヴェンキ語における「シャーマン」という語の語根を考察した結果、「シャーマン」の本当の意味は「知る」という意味であると証明した。つまり、「シャーマン」というのは、神様の意志を最も知り得る人であり、人間と神様とを疎通する仲介者である。ところで、「シャーマン」が神様の世界と交流する方式と表現形態は、極度に興奮する特徴があるので、例えば、満州族の「シャーマン」はよく手で太鼓を叩いたり、口で偈頌を唱えたりして、激しい太鼓の音に誘発されて、人間とは思えないような状態に入り、尋常な人ができないようないろいろな動作を作り出した。これによって、神様をシャーマンの体内に付着させ、或いはシャーマンの霊魂が身体から外へ飛び出して、神様の世界で遊泳し、神様と会話したり、或いは霊と闘ったりするのである。このとき、シャーマンは人間と神様との境目がなくなり、彼の動作と言葉は全部神様の意志であり、表れである。オロチョン人の言葉を借りていうと、「神様はシャーマンの口を通して人間と会話する」のである。

二、東北シャーマン教の分布

東北に誕生し生活していた多くの土着民族を、先代学者たちは、彼らの部族、言語、文化、経済と生活、などの各方面の同異により、東胡——モンゴル族系と肅慎——満州族系、扶余族系に分類した。当然、これは大雑把な分類なので、十分に正確とは言えないが、東北シャーマン教の分布と変遷を説明するために、一応この分類に従うことにする。

1) 東胡——モンゴル各民族におけるシャーマン教

烏桓、鮮卑、契丹、モンゴルなどの民族は東北の西部に起源し、のち草原に入り遊牧民族となった。民族学者たちは彼らを一つの族系——東胡族系にまとめた。これらの民族は、中国の歴史書物に現れたときに、すでに「逐水草而居（水と草あるところをおって住居とする）」であった。しかしながら、遙かの昔、彼らの祖先は東北森林の狩人だった。原始シャーマン教の、万物に霊があり、樹神、獣神（鷹鳥虎狼など）、祖先などの神霊に対する崇拜観念は、かつて彼らに深刻な影響を与えたのである。後に、彼らは森林を出て草原に入り遊牧民族となり、歴史舞台に波乱万丈の英雄偉業を作り出すことに、シャーマン教も彼らと長い間共にあった。契丹人は森林にいたときでも草原に入った時期でも、シャーマン教を信仰していた。遼王朝を建てた契丹人は、国家行事を行うときに、天、日、風、兵神、白馬神、麋鹿神等を祭る儀式があり、またいくつものシャーマン神器も残っていた。後になると、多神教となったシャーマン教は、統治者と国家の需要に応じなくなったため、佛教にとって代わられた。

モンゴル人は国家を建てる過程において、シャーマンは氏族部落時代と同じように、常に高い威信をもってきた。モンゴル各部落を統一し「大汗」となった鉄木真（チンギスハン）はシャーマン教を信仰していた。モンゴルを統一して権力を獲得するまでの間に、彼のそばに最も威信を持っている二人シャーマンがいた。一人は豁兒赤で、もう一人は闊闕出である。1206年春、モンゴル各部落が斡難河のほとりで大会を開き、鉄木真に「大汗」という称号を授与するとき、二人のシャーマンが「天神（最高の主）」を代表して、「チンギスハン」の称号の合法性を宣告した。13世紀のモンゴルでは、権勢を持っているシャーマンはほとんど宮廷に集まっている状況だった。モンゴルのシャーマンが崇拜して

いる神は大体以下の六種類である。

- | | | |
|----------|-------------|-------|
| 1. 騰格里天神 | 2. アグニ (火神) | 3. 地母 |
| 4. 星宿 | 5. 白老人 | 6. オボ |

206年に、チンギスハンはモンゴル各部落を統一した後、中国の中原とユーラシアへの遠征を始めた。その間に、モンゴル人は当時、他の民族の物質文明と精神文明に触れることで、自己の固有的な宗教信仰に大きな衝撃を受けた。このような背景において、ラマ教は13世紀から元世主である忽必烈(フビライ)の宮廷に入り込み、上層統治階級の中に、次第にシャーマン教に取って代わった。その中で、チベット仏教のニンマという宗派の発展は最も早かった。14世紀末、青海省のチベット族のニンマ派から出た改革派であるゲルク派——黄教は明王朝の統治者とモンゴル封建主の外部支持を取りつけるために、モンゴル諸部落へ勢力を伸ばし始めた。16世紀後半に至り、黄教の寺院はモンゴル各地に相次いで建てられ、ラマ教はこれらを基地として、シャーマン教への痛烈な打撃を開始し、その地位を取って代わった。東北のモンゴル族においても、シャーマン教とラマ教は長い間の激しい闘争によって、シャーマン教の勢力とその影響力はだんだん衰弱していた。清末から中華民国期にかけて、一定のシャーマン勢力が存在していたが、全体から見れば、モンゴル各部落はほとんどラマ教に征服された。

2) 肅慎——満州諸族のシャーマン教

肅慎人は遙か昔の商周時代から東北に生活していた先住民である。中国歴史上、この族系に属するのは、その他に、また漢魏時代の挹婁、勿吉があり、隋唐時代の靺鞨(まっかつ)や遼金時代の女真があり、及び明代建州の女真と海西の女真に基づいて形成された満州族がある。この族系の中に、満州族のシャーマン教は比較的典型的な特徴を持っているのである。中国歴史書にシャーマン教に関する明確な記載があるのは金代の女真からである。例えば、「珊満者、女真語巫媼也、以其變通如神、粘罕以下皆莫能及³」(珊満とは女真語の^{みこ}巫媼なり。以って其の変通は神の如く粘罕以下、皆及ぼすに能わず。)とある。満州族は女真に基づいて形成された民族として、そのシャーマン教が比較的完全な宗教儀式を残してきた。東北各民族の宗教信仰(特にシャーマン教)の集大成であるといえよう。シャーマン教は典型的な多神教であるので、満州族の多神崇拜対

象は主に以下のようなものがある。

1. 自然の神祇崇拜、例えば、日月星辰、特に太陽神の崇拜。
2. 鳥神の崇拜、例えば、鷹、鷲、鶴、烏など。満州族の各部落によって鳥類の祭祀は異なる。
3. アグニ（火神）の崇拜
4. 地神と水神の崇拜
5. 植物神の崇拜、主に樹神の崇拜
6. 祖先の崇拜
7. 子授け（生育）の崇拜

シャーマン教は満州族の興起に伴って盛んになったが、他の多くの東北地方の宗教と同じように、衰弱への道を歩んだ。その衰弱原因は、一つは仏教の伝来；一つは漢族文化の影響；一つは清太宗である皇太極が統治するとき、シャーマン教の活動を制限したからであった。しかし、満州族のシャーマン教は完全に消滅しなかった。また、皇太極はシャーマン教を制限したが、宮廷内のシャーマンの祭祀活動をやめることはなかった。1644年満州族は北京に入り清王朝を建て、シャーマン教の信仰も満州族の中において、宮廷の堂子祭を代表とする貴族信仰と下級の普通旗人（清代の「八族」に属した人）の民間信仰に分かれた。その事情の紹介はここでは省くこととしたい。

3) オロチョン (Orogon)、エヴェンキ (Ewenki)、ダフル (Daur)、 ホゼン (Hezhen)、シボ (Xibe) のシャーマン教

これらの民族はみな黒龍江の流域と興安嶺の森林に住む東北先住民である。彼らはモンゴルや満州族のように激しい社会変革を経験することはなかった。生産方式や生活方式、及び社会秩序は割合に平穏であった。例えば、オロチョン、エヴェンキなどは主に漁労と狩猟を中心とする民族であり、長い間父系氏族社会の晩期段階にとどまった。彼らは同一の民族ではないが、彼らの共通宗教はシャーマン教である。しかも、彼らのシャーマン教は同じ特徴を多く呈していた。満州族のシャーマン教との共通性も多いので、ここでは詳細に立ち入らないでおく。

三、変化と影響

シャーマン教は東北地方の先住民族の中に、いたるところに存在し、かつ広く影響を及ぼした。しかし、歴史と社会の発展につれて、シャーマン教にも大きな変化が起こり、モンゴル族、満州族などの諸民族の中で、次第に「国家宗教」に取って代われ、分裂し衰退していた。しかし、その勢力と影響力は完全に消滅しなかった。黒龍江の流域と興安嶺の地区に生活しているオロチョン族、エヴェンキ族、ホジェン族などの民族は、居住環境の辺鄙と厳しさ、また社会環境の閉鎖と生活方式の特異性ということにより、20世紀半ばまでに、シャーマン教は彼らの生活の中にずっと存在し、また信仰されていた。この意味で、彼らはかなり完全なシャーマン教を保持しているといえよう。また、満州族もシャーマン教の内容を多く保存している民族の一つである。満州族が北京に入り国家政権を創立した後も、東北に残った満州族の間にシャーマン教が依然として存在し続け、多大な影響力を持ち、祭り、祭祀、病気払いと厄除けの場合に重要な役割を果たしていた。「シャーマン」の跳神（訳者注：巫女が神係りになって踊ること。「大跳神」とも言う）を見るのも、満州族の民間における重要なイベントの一つとなっている。

清代中葉、漢族が大量に東北地方に移住して、儒教と関帝（三国の関羽）崇拝を伝えた。それはシャーマン教に対して、かなりな衝撃を与え、崩壊させていく原因の一つでもあったが、同時に東北の固有のシャーマン教は漢族へ大きな影響を与えていることもある。例えば、シャーマン教の跳神儀式と跳神の持つ性質と機能は漢族に吸収され、「跳大神」が20世紀中葉までに、東北の民間、特に辺鄙な地方でずっと存在していた。また、東北漢族の民間の中から生まれた地方劇の「二人転」、つまり男女一人ずつ、それぞれが扮した女形と道化役が、セリフを語ったり、歌ったりしながら踊るという芝居の様子は、シャーマン教の跳大神と基本的に似ている。その文化と精神の根源はシャーマン教の跳大神とかなり共通することが多い。更に、今でも東北民間に流行している「ヤンコ踊り」（訳者注：中国北方の農村で広く行われる銅鑼や太鼓に合わせて歌いながら踊る民間舞踊）にも、シャーマン教文化の影と痕跡がある程度まだ残っている。この意味において、1950年代以後、シャーマン教文化は次第に消え去っていたが、その文化要素はすでに民間芝居や民俗習慣の中へ浸透し、異なった形や方式で存

にしているということが出来る。近年、遠い辺境の山岳地帯のある農村、特に満州族と少数民族の集中する地域では、シャーマン教活動を復活する動きが現れたが、その現象が今後広がることまではないであろう。

四、近代東北文学の中におけるシャーマン教

中国近代文学史上における著名な東北作家グループは、20世紀1930年代に現れた。彼らの文学創作と活動は40年代までずっと続いた。文学は生活を反映し表現するものである。東北作家グループの作品の中のシャーマン教の跳神に関する描写は、30年代に東北民間にはシャーマン教がまだ存在し、しかも一定の勢力と影響を持っていたことを示している。

30年代に東北作家グループの小説創作する中で、シャーマン教に対する描写は主に二種類ある。第一は彼らは東北地方における当時の地域文化、社会環境、民俗習慣などの特徴を表すために、直接的に或いは意識的にシャーマン教跳神の場面と過程を描いたのである。東北で著名な女流作家である蕭紅氏の『呼蘭河伝』という小説の第二章に1300字を費やして、呼蘭河という田舎町の跳大神の「盛況」を描写し、1920年代の東北呼蘭河という田舎町の環境と文化構成の寂しさと落伍を批判的に表現している。また、同じく東北作家端木蕻良氏が1939年に出版した長編小説『科爾沁旗草原』の中にも、清末から民国初期にかけて、東北の科爾沁草原にいた大地主丁四爺は、他人の財産を横取りした暴行を正当化するために、金でシャーマンを雇い跳神させ、そして自分が奪い取った不義の財産で「にわか成金」になったことは天意や神意であると、舞い狂った大神の口を通して、人々に突きつけた、ということが詳しく描かれている。ところで、大地主の家族がシャーマン大神を利用して、自分を弁解するという行為は、当時の漢人地域にあったシャーマン教がだんだん世俗化や道具化となっていくことと、シャーマン教の勢力と影響力がまだ存在していることを意味している。また、一般の民衆がやはりシャーマン教とその権威を信仰していることも示している。端木氏のもう一部の長編小説『大江』には、更に長い紙面(6000字)を使って、東北山林地帯に、あるシャーマン教跳神のにぎやかな場面とその仔細過程を生き生きと描いている。この跳神の目的は鉄嶺という農民が母親の病気を払うために行ったのである。端木氏は大神と二神の服飾、跳神用の道具、大

神が跳ねるときの酔っ払い姿、狂ったような身振り、そして節回しに合わせる言葉や二神の応答、及び周りの観客の心理反応と評価を詳しく描いた。中国の「五四」運動(1919)に提唱された科学と民主思想の影響を受ける現代的な作家として、端木氏はシャーマン教の跳神に対する態度と描写が矛盾に充ちているようにも見受けられる。彼はシャーマン教跳神の場面と過程を批判的に描き、当時の東北地方における生活水準の落伍と民衆思想の愚昧さを反映しようとしている。これは蕭紅氏の『呼蘭河伝』の跳大神を描写した態度と同じである。しかしながら、幼いごろから、東北地域文化の影響を深く受けた人として、端木蕻良氏はまたシャーマン教が東北地方文化と環境の有機的な構成の一部であり、東北地方に存在する合理性があると考えて、更に科学がまだ発達普及していない時代にはシャーマン教は人々の病払いと厄除けという心理と精神両面の必要に満足させるため、また自然の生態と人々の心理状態のバランスを維持するために、一定の役割を果たし、ある程度の実用的な機能があるとも指摘している。彼の『大江』の中に、それは、次のように書かれていることから知られている。「荒れ果てて、広大な農村において、ローカルな宗教には濃厚な蠱惑性がある。この蠱惑は抑圧された彼らの精神の隅っこと拘禁された肉体官能の上にすべり落ち、彼らにある種の錯綜的な満足を与えた。痼疾が罹った病も常にこの変態した神秘的な潜在意識により官能を解放し、新しい源泉に触れて、よくなっていくことを愛慕した」と。

もう一人の東北作家である駱賓基氏の長編小説『少年』には、20世紀1910～20年代、東北吉林省の辺境にある小さな町の社会と人生の情況を描いた時に、シャーマン教跳神についてのエピソードもはさんだ。しかし、駱氏は少年時代の温かな思い出という筆致で、彼の少年時代の生活ぶりを書いたのである。従って、彼が描いたシャーマン教跳神のプロットは、批判することなく、むしろ当時東北辺境の小さな町の一幅の鮮やかな文化と民俗の風景絵画である。ともかくも、蕭紅氏の描いた黒龍江、端木氏の筆鋒下の遼寧、そして、駱氏の書かれた吉林省、という東北作家のグループは、当時広大な東北地方に活躍していたシャーマン教の姿や行事の様子を描き出している。

第二に、その他の東北作家の作品の中には、シャーマン教の存在と活動を直接には描写していないが、彼らが書かれた自然風景、生活習俗には、シャーマン教の文化を内包し、何らかの精神的な繋がりがある。換言すれば、彼らの描

写した自然風景と生活習俗の中に、シャーマン教の文化要素が織り込まれていると窺える。例えば、東北作家の蕭軍氏の長編小説『第三代』の中に「三本の神松」という伝説と物語が書かれている。端木氏の長編小説『大地の海』の中にも、大変革の時代が起こるたびに、「神松」が猛りほえだすことを紹介している。このような物語は、明らかにシャーマン教文化の中にある「樹神崇拜」との精神的な血縁関係を持っているのである。東北各先住民族のシャーマン教文化の中に、生存環境と生活方式の影響によって、植物や木のトーテムに対する崇拜が多く存在している。満州族とホジェン族の創世神話の中に、樹神の伝説もたくさんある。各民族の崇拜する樹は一様ではなく、例えば、松、ノニレ、柳、樺の木とそれぞれ異なる。しかし「樹神」を崇拜する点においては、一致するのである。従って、東北作家の「神松」描写はシャーマン教文化の「樹神」崇拜と何らかの関わりがあるといえよう。また、他のあるプロットとその細かいところ、例えば、端木氏の『大江』の中に、狩猟山民が「獣神」と「山神頭」に対して礼拝することや、狩猟するときの祭事を行うことなどは、もちろんシャーマン教文化の「動物トーテム」崇拜や「血の祭祀」の習俗と、精神的な関係を深く持っているに違いない。

1930年代の東北地方作家グループの小説中にあるプロットにおける、シャーマン教文化との関わりはこの他にもたくさんあるが、筆者および他の研究者がこれについてすでに発表した論文があるので、ここではこれ以上論述することを省きたい。

註

- 1 富育光：『薩満教与神話』、遼寧大学出版社、1990年
- 2 劉小萌：『薩満教与東北民族』、吉林教育出版社、1990年
- 3 『三朝北盟会編』巻3、清光緒4年刻本